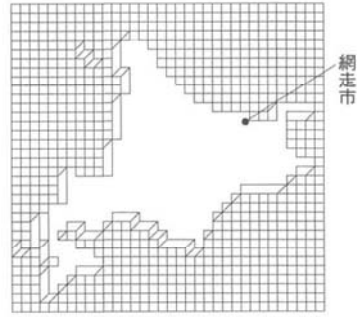


連 載



あのマチ・地域おこし活躍中
このムラ

No. 18

網走市の概要

二十一世紀に向けた農業振興計画
策定作業進行中

◇網走市の概要

網走市は、オホーツク圏における中核都市として農業、水産業、観光を柱に発展を続けている人口四万二千人余りの街である。

北海道のオホーツク海に面する網走支庁管内の東部に位置し、東は小清水町、西は常呂町、女満別町に連なり、南は東藻琴村に接している。広さは東西三二・八km、南北二〇・七km、総面積四七〇・八平方*。網走湖をはじめとする四大湖と、一級河川網走川及び普通河川七〇本が流れ、昭和三十三年に網走国定公園の指定を受け、年間を通して全国から二百万人を

越える観光客が訪れる風光明媚な地でもある。

気象は、比較的温暖で積雪は少なく、日照時間の長い地域である、例年一月下旬から三月下旬にかけて沿岸部は、神秘に満ちた流水により全海面が結氷する。

◇網走市農業の現状

網走市の農耕期間の平均気温は十四・八℃、日照時間八六五・三hr、降水量四一六・六mmと各作物の栽培が可能であるが、ばれいしよ、てんさい、麦類の三作目を主体にした機械化一貫体系による土地利用型の畑作農業を中心に展開している。

耕地面積は一四、四一六haで網走市の総面積の三六%を占め、殆どが平坦な段丘である。耕地面積の内訳は、普通畑が二、一〇四ha、樹園地一八ha、牧草地二、三五〇haとなっている。

平成十年二月現在の家畜飼養頭数は乳用牛四、一〇四頭、肉用牛二、〇二七頭である。

農家戸数は平成十年で五〇四戸うち専業農家三七二戸、七三・八%を占めており、一戸当たりの経営面積は二・八、六haで拡大化の傾向にある。

経営規模別戸数では一〇ha未満八六戸一七・一%、一〇～二〇ha六七戸一三・三%、二〇ha以上の



◀網走市の馬鈴薯畑

農家が三五一戸六九・六%となっており、昭和五〇年以降大規模化が進んでいる。

農業生産額は平成九年で一九八億六千万円うち、プロイラー、食肉の商系扱いを除いた農業者生産額が農産一〇〇億四五百万円、畜産一六億一六百万円の合わせて一六億六一百万円である。農産の品目別では、てんさい三七・四億円三七・一%、ばれいしよ二九・一億円二九・〇%、麦類一七・四億円一七・三%と畑作三品が八三・

表1 主要農作物の作付け面積

単位：ha

作物名	平成7年	平成8年	平成9年
麦類	4,240	4,170	4,075
てんさい	3,560	3,560	3,555
ばれいしょ	2,940	2,880	2,920
野菜	282	353	401
豆類	287	352	382

(網走市農政課調べ)

五%を占め次いでだいこん、ごぼう、ながいも等の野菜が一〇・六億円一〇・五%、畜産では生乳が一三・一億円八一・七%と大部分を占めている。

また、農家一戸当たりの生産額は平成八年のデータで二、〇〇六万円、農業所得は九三三万円である。

◇農協統一へ

網走には現在、オホーツク網走

表2 農協別農家戸数の推移

農協	平成元年	平成3年	平成5年	平成7年	平成9年	9年/元年
オホーツク	480	445	433	407	396	82.5%
網走市	99	89	80	72	63	63.6%
計	579	534	513	479	459	79.3%

(農協総会資料より：戸)

農協と網走市農協の二つの農協がある。

昭和二十二年の農協法制定に伴い、市内の四地区にあった農業会が解散し翌二十三年に北浜に南網走農協、藻琴には網走市中央農協、卯原内に西網走農協、そして市街地に網走市農協の四農協が設立された。

農協合併については農業基本法が制定された昭和三十六年から協議が始まったが安定経営が故になかなか進まなかった。

しかしながら長年の努力が実を結び、平成三年に南網走、網走市中央、西網走の三農協が合併しオホーツク網走農協が発足、そして平成十一年には網走市農協との合併が予定されており、市内四地区に農協が設立されて半世紀余りの歴史を経て漸く一つにまとまりまもなく新たなスタートをきる。

◇営農集団と

農業機械利用組合

北海道は農業基本法の優等生と言われているが、その中でも網走は畑作の機械化一貫体系モデル地

区として全国的に脚光を浴びてきた。

網走の農業は、寒冷地作物であるばれいしょ、てんさい、麦類の三作物による輪作を機械化により行い発展してきたのであるが、それは農協を核として集団再編と機

表3 平成10年営農集団(組合)と利用組合

農協	集団数	利用組合	利用組合加入率
オホーツク	34	40	79.8%
網走市	8	7	41.9%
計	42	47	74.4%

(農協資料より：広域コンバイン利用組合、集団間協業分は除いた)

械利用組合組織の確立により実現したものであると言える。

生産組織は当初、農事実行組合としてスタートした。農業生産の近代化のための農業構造改善事業により農業機械が導入され始めた昭和三十八年に利用組合が発足しかし、単位となった農事実行組合が細分化されていたため機械利用の効率化を進めるため昭和四十五年から再編が始まり農事実行組合から営農集団（網走市農協地区は営農組合と呼ぶ）となった。

そして、同時期からスタートした第二次構造改善事業の導入と相まって集団単位の利用組合が整備されたのである。

現在、営農集団数四二、利用組合は四七組合、その他に広域コンバイン組合等が組織されている。利用組合の約三分の一は、播種から収穫までの作業を一貫して共同で行い、コストの低減と作業の効率化、労働時間の短縮を図っていることが大きな特色と言える。

◇第四の作物の導入

農業の国際化の進展と需給緩和

による価格低迷のため、畑作専業農家にも野菜や肉用牛を取り入れ複合化による経営の安定化と三年輪作から四年輪作体系の確立を目指し野菜の導入を積極的に進めている。

オホーツク網走農協地区は根菜類の「だいこん」「ごぼう」「ながいも」等、網走市農協地区は「いんげん」「枝豆」等が基幹品目として栽培され大半を道外市場に出荷し年々評価が高まっており、作



▶オホーツク網走農協
野菜集出荷選別予冷施設

表4 オホーツク網走農協基幹野菜作付け面積の推移

単位：ha

品目	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	10/6
だいこん	14.86	26.11	37.36	52.91	71.00	478%
ごぼう	46.23	56.08	77.58	77.96	76.41	165%
ながいも	25.61	31.98	34.25	42.22	45.65	178%
たまねぎ	27.89	29.72	31.70	31.39	29.56	106%

(農協資料より)

付け面積も順調に増えている。

特徴的なことは、オホーツク網走農協地区での野菜の取り組みである。それは、機械化体系が一定程度形成された省力的な野菜を畑作三品を作りながら作付け可能な品目を集団（利用組合）単位で取り組んでいることである。

勿論、播種から収穫まで共同作業であり一戸当たりの作付け面積は全て一律（南部地区の「だいこん」は約二割）各戸の播種時期は集団で決定、精算はプール計算である。集団単位の機械化による取り組みであることから面積が一気に増加し、平成七年に設置した選果予冷施設が限界状況になつてきている。今後とも作付け面積の増加が見込まれており、一大産地が形成されようとしている。

◇わさび、朝鮮にんじん さくらんぼの取り組み

網走のユニークな取り組みとして「わさび」「朝鮮にんじん」の栽培とさくらんぼ観光農園がある。わさびは、昭和四十三年から栽培を行っており、現在四八戸の農家

◀朝鮮人参



が作付けし、生おろしわさび、粉わさびの原料として市内にある金印わさび(株)工場に出荷している。

また、市内南部の第二五営農集団では、昭和六十三年から朝鮮にんじんの栽培を始め、オホーツク網走特用作物栽培研究会を組織し、生産された朝鮮にんじんを真空パック及び乾燥粉末に加工して販売を行っている。現在では道内唯一の生産地であり、製品は北海道衛生研究所での成分分析の結果、高い評価を得ている。

さらに、網走では十数年前から三五戸の農家が新作物としてさくらんぼを導入し試験栽培を行ってきた。収穫可能な成木が増えたことから、樹木単位に突ったさくらんぼを、そのまま買い取るオーナ

制農園やもぎとり農園として毎年次々とオープンしており北限の観光農園として注目されている。

◇東京農業大学寒冷地農場

網走市の天都山の山麓に平成元年東京農業大学生物産業学部が開校した。寒冷地農場はこれに先駆け昭和五十七年市内南部の音根内地区に総面積二一・六畝の規模で開設されている。



▶東京農業大学寒冷地農場

農場の主な部門は栽培部と経営部である。栽培部は網走地域の生産体系の発展を目的としてばいしよ、てんさい、麦類の三作物を主体にした第四の作物の導入に関する試験の他、かんがい水の有効利用を目的とした畑地かんがい試験を昭和六十年から実施し平成九年に農家が営農の中でより効率的にかんがいを活用できるよう作物別のかん水適期、土壌特性と土壌水分にかんする知識等を盛り込んだマニュアルを発行して好評を得ている。

経営部は地域営農集団による経営方式を取り入れ、職員が農業者としてオホーツク網走農協の組合員になり、そして第二四営農集団及び利用組合の一員となり実際に農業経営を行っている。毎年一定の所得があり、他の大学農場には例のないめずらしい仕組みをとっている。

平成十年四月から生物産業学部の直轄施設になり、運営も全て地元中心になったことから今後さらに、地域に密着した取り組みが期待されている。

◇卯原内酪農生産組合の取り組み

網走市街より北西のサン丁草で有名な能取湖に面した一角に五戸の構成員によって、生乳、麦類、ばいしよ、てんさい及び青果物を生産している農事組合法人卯原内酪農生産組合がある。

昭和三十九年に四戸の農家が共同経営を始め、二年後の昭和四十



▶牧草収穫

一年に二戸が加わり法人組織としてスタートした。現在、二〇〇名の畑作と乳牛二五〇頭の酪農経営を行っているが設立当初から酪農部門と畑作青果部門の有機的結合により、耕地の効率的使用と完熟堆肥の投入による土壌の肥沃化に努め高い生産性をあげている。

酪農は昭和六十三年にフリーストール牛舎、ミルクングバーラーを完成させ、コンピュータによる飼養管理を徹底し、一日二回搾乳給餌一回で年間一頭当たり平均乳量が平成四年に二万kgを超えた。給与制・六〇才定年制をいち早く採用し、さらに新規構成員は組合の後継者に限定せず、外部からも参入できるように組織の活性化を図っており、現在二戸が東京都と津別町の出身者である。

また、平成四年には事務所兼研



▲コンバイン刈取り

修宿泊施設を新築、将来農業をやってみたい、農業を体験してみたいという人を年間一〇数人実習生、研修生として受け入れており後継者育成に努めている。

一戸の年取給与は八〇〇万円、一〇〇〇万円、冬期間は週休二日農繁期でも週一日の休日を確保し、楽しくそしてゆとりある農業を実行している。

以上のような活動が高く評価され、平成六年に日本農業賞大賞を受賞したほか同年一月には農林水産省において酪農部門として日本一を証明する天皇杯を受けている。網走では全国の酪農のモデルとなる組織も活躍中なのである。

◇資源の有効利用

オホーツク網走農協では澱粉工場から大量に排出される生ポテトを有効に利用し、土壌改良に役立てるため昭和五十四年に澱粉工場に併設して堆肥工場を建設した。この工場は、澱粉工場から出る生ポテトパルプに近隣のピート工場の遊離土や鶏糞、ロール麦かん等を混入して半製品を製造し、これ

を営農集団の堆肥盤に供給して製品化し、地力増進に利用しようというもので、農産加工の廃棄物を原料に堆肥を生産し、再び畑に還元して役立てるといふリサイクル農業を展開しているのである。廃棄物の再利用という点でも大きな意味を持つが、機械化農業で有機質肥料に不足していた畑作農家にとって、得がたい有機質肥料の一つになっている。



▶オホーツク網走農協堆肥工場

また、網走は水産業も盛んであり、ほととの加工場から大量に出る貝殻を煮沸、粉碎したものを土地改良の暗渠の被覆材として利用している。今後環境にやさしく持続的な農業の展開を大いに期待したい。

◇さらなる飛躍を目指して

網走の農業は先人達の弛まぬ努力によって厳しい条件を乗り越え、地区の特色を生かした農協個々の取り組をベースとして発展してきた。平成十一年に農協が漸く一つになることから、現在、平成十二年度からの農業振興計画づくりを農家、農協、行政、普及センター他関係機関の全てが参加し当研究所が基礎調査を担当し進めているところである。

関係機関が一丸となった取り組みは今までなかったことであり、このことは、様々な課題を克服し、まもなく迎える二十一世紀に活力に満ちた網走農業の確立に向けて確かな一歩を踏み出したと言える。

レポーター
特別研究員 中谷 隆